

近年の少子高齢社会の進展とともに、国際観光にも新しいトレンドがみられる。ロングステイ・ツーリズムがそれだ。長期滞在型の海外観光で、とりわけ退職者や年金生活者が第二の人生を海外で過ごそう、というものである。

「ロングステイ」という言葉は、1992年に当時の通産省の認可を受けて設立された公益法人・ロングステイ財団の造語だといわれる。ロングステイ財団では、「生活の源泉を日本に置きながら海外の1か所に比較的長く滞在し、その国の文化や生活に触れ、現地社会に貢献を通じて国際親善に寄与する海外滞在スタイル」と



観光人類学ウォッチング —ロングステイ・ツーリズム—

山下 晋司 *Written by Shinji Yamashita*

定義している。海外長期滞在型余暇の過ごし方で、その意味では新しい海外観光のスタイルでもある。

旅行会社各社は、特に2007年に退職を開始する団塊の世代を視野に入れて、この新しいマーケットに手をつけはじめしており、ロングステイ体験ツアー、下見ツアーなどが企画・実施されている。出版も、JTBパブリッシングから『年金を活かす! 海外ロングステイ30都市徹底ガイド』(柳沢有紀夫編著、2004)が刊行され、「地球の歩き方」でおなじみのダイヤモンド社は「地球の暮らし方」シリーズの一つとして『ロングステイ2003-2005版』(2003)を出している。ロングステイ専門誌、「海外で“人生を遊ぶ”おとなの旅行誌」として『rasin(季刊ラシン)』(イカロス出版)が2003年から発刊されている。

ロングステイ先としては、タイのチェンマイ、マレーシアのペナン、オーストラリアのゴールドコースト、タイのバンコク、アメリカ合衆国のハワイなどが人気ランキングのトップグループだ(ラシン編集部編『ロングステイ都市ランキング 楽園の探し方』イカロス出版、2005)。他方、受け入れ側も「退職者ビザ」を用意するようになっている。特にタイ、マレーシア、フィリピン、インドネシアなど東南アジア諸国が積極的だ。タイやマレーシアでは、高齢者のケアとからめて「ヘルス・ツーリズム」の一環として展開

するむきもある。

ロングステイ・ツーリズムは、より大きな視野からみると、「国際退職者移住」(international retirement migration)の一部である。ヨーロッパでは、イギリス人やドイツ人など北ヨーロッパの人々が退職後、気候的にも生活的にもより快適な南のスペインで過ごすことは1970-80年代からみられ、EU成立後その傾向は加速している。

日本でも、同じ額の年金を使うなら、物価が高く、ますます暮らしにくくなりそうな日本よりコストの安い海外で、日本ではできない質の高い退職生活を送るという生存戦略の選択は大いにありうる。少子高齢化社会の到来で、ますます現実味を帯びてきたわけだ。こうしたなかで日本は、近い将来、アジア諸国から若い労働力を「輸入」し、日本からは年寄りを海外に「輸出」、という国になるのであろうか?

CEL

山下 晋司(やました・しんじ)

東京大学大学院総合文化研究科教授。1948年山口県生まれ。73年東京大学教養学部卒業。78年東京都立大学大学院社会科学部研究科博士課程修了。専門は文化人類学。編著書に、『観光人類学』(新曜社)、『パリ:観光人類学のレッスン』(東京大学出版会)、『文化人類学入門:古典と現代をつなぐ20のモデル』(弘文堂)、『現代人類学のプラクシス:科学技術時代をみる視座』(有斐閣)など。